

『帝国の慰安婦』著者・朴裕河 世宗大学教授 × 中島岳志 本誌編集委員

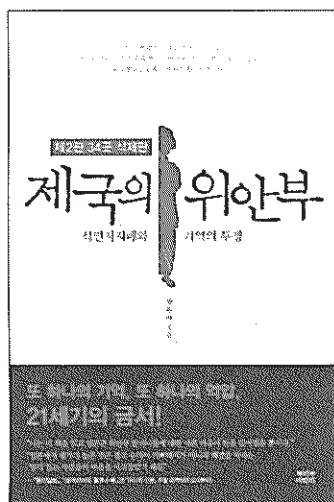
サバルタンの声は届いたのか

韓国の朴裕河世宗大学教授が著した『帝国の慰安婦』が、日韓の学者らの間で長期的な論争を呼んでいる。元「慰安婦」9人による名誉毀損の刑事告訴で、昨年11月に朴教授は在宅起訴されたが、これに日米の学者など54人が抗議声明を出した。一方、声明への反論も起きた。声明に加わった中島岳志本誌編集委員の要望で今年2月、来日していた朴教授と対談をした。『帝国の慰安婦』をめぐる問われていることは何か。

中島 私は『和解のために』の日本語版が2006年に出た時、朴さんのことを知りました。その後『帝国の慰安婦』(注1)が韓国で議論を呼んでいることを知り、日本語版が出てからすぐ読みました。

この本の重要な枠組みの背景にあるのは、サバルタン(注2)・スタディーズが投げかけた問題です。これは、1980年代にインドを中心に出てきたもので、「抑圧された人たちの主体性をどう読むのか」を問うています。

『帝国の慰安婦』は「慰安婦」の多元的な主体性を取り上げ、さまざまな苦境に追いやった帝国の暴力を描いている。日本の帝国主義を擁護しているとの声がありますが、そうではない。非常に正しい日本の帝国主義批判の本です。朴 まさにそいつった問題を私も考えていました。「帝国の慰安婦」という言葉も批判されますが、「帝国に動員された」というのが一番



の意味です。その次に、「協力させられた」という意味があります。「どちらが中心なのか」とよく聞かれますが、それを迫るのは、これまで定義されてきた概念で自分の理解を促すという思考の結果だと思えます。「慰安婦」の多元的な主体性についての規定を留保し、曖昧な状態におくことが耐えられないと感じるのは、そうした思考があるからではないでしょうか。

「愛国」は過剰適応の結果

中島 朴さんが書かれた重要なこととは、「慰安婦」を斡旋した朝鮮人

2015年2月、訴えの出ている100以上の記述のうち、34カ所が元「慰安婦」9人の名誉を傷つけているとソウル東部地裁は決定。写真は34カ所が修正・削除された『帝国の慰安婦』韓国語版第二版。

業者の問題です。彼らは女性の連行に加担した。しかし、彼らにも生活がある。生きていくには、日本の意に沿う必要があった。一方、一部の「慰安婦」たちは苦境に追いやられる中で、帝国陸軍を支えているという誇りを持ち始める。これは、ある種の過剰適応です。日本の右派の人たちが、「ほら、うまくやってるじゃないか」と主張するのは真逆な話なんですよね。それが間違えて捉えられ、右派の議論と同列にされてしまっている。私は人類学をやった上で、歴史を研究しましたが、右派と左派の物語のはざまでも誰もが打ち捨ててしまっている人がごっそりいるというところに気付きました。それが、私が『中村屋のボース』を書くことになった大きなきっかけです。ボース(注3)は日本の帝国主義に批判的でありながら、日本の軍事力を使って、アジア、インドを解放するという手段に打って出

た。右派、左派それぞれからの歴史だけでは捉えられない人物です。同じ問題が、韓国の親日派と呼ばれる人たちの評価にも現れています。たとえば李光洙(注4)。彼は単に日本におもねったのではなく、日本に対する非常に厳しい批判論者だった。それが30年代になって変わる。なぜかというところ、「二君万民」(注5)などの日本の国体論を流用して、「皇国臣民は天皇陛下のもとで平等だ。『内鮮一体』(注6)というのだったら平等にしてくれ」ということを言うためです。こういう切り返しをするために、日本の国体を流用していく。この主体性を丁寧に読み解くことが、私は重要だと思えます。朴 『日本軍慰安所管理人の日記』(注7)という本が韓国で13年に出されましたが、読んでいくと、この管理人の男性は「皇国臣民」といえるマインドを持っています。本の後半に出てくる1944年の元且の日記には、「皇威を四海に輝かすべし」「皇軍の武運長久を祈った(321ページ)」とある。彼は1905年生まれですから、まさに日本による併合時代を生きた人です。そういう人の中に「愛国」と呼べる心が生まれていることは不思議ではありません。とくに総力戦体制以降はこうした枠組みの中で動員されたということを、私

の本では強調したつもりです。同時に、右派の思考や議論のどこが問題かも書きました。

右派へのサポートではない

中島 「慰安婦」とされた女性たちと兵士のいわゆる擬似家族化という問題を、右派の人たちは「いい思いをしてきた」と解釈してしまっています。ですが、これほど過酷な悲しみはありません。

『帝国の慰安婦』で書かれているのは、田舎に家族を置いてきた日本人兵士が、「慰安婦」に擬似家族を求めていく姿です。彼らは前線で死の恐怖と闘っている。涙を見せなくてはならない。唯一、弱さを発露できる相手が「慰安婦」だった。

「慰安婦」たちは、その悲しみと苦しみを受け止めようとする。一部の兵士は「慰安婦」と同様に、自分の意に反して徴兵されたわけです。しかし、その兵士の行為は「帝国」によって構成された加害の構造から逃れられない。

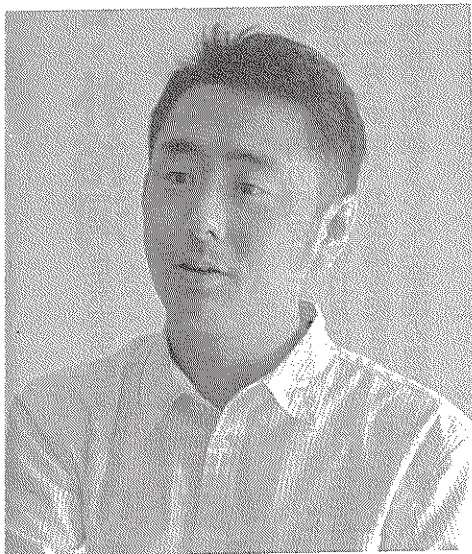
朴 時期と空間によって異なる体験をしているので一人の「慰安婦」の中に複合的な感情があるということと、同じ時期と空間の中にも、年齢や日本語の能力などによって経験や思いは異なることも忘れてはならないと思います。

この中で私が書きたかったのは「国家の物語に入れない人たち」

です。心からであれ、表面的であれ、人は国家の物語に自己をアイデンティファイ(同一化)します。ですが実際には、そうした「物語」から外れる体験や思いはいくらでもある。それが表面化した時、国家の中心部にいる人々はそれを隠蔽したり、逆に懲罰したりします。そこにジェンダーの問題があるの

は言うまでもありません。中島 これを日本の右派をサポートする議論だとか、日本への免罪論と捉えられてしまうのは本当におかしい。日本の特攻隊で死んだ若者たちがいますが、この「物語」は右派が一元化しています。国家のため、天皇のために命を捨てて

これは、非常にするどい日本の帝国主義批判の本です。——中島



いったと。でもこの物語からズレる特攻隊員はたくさんいるわけですが、嫌で嫌で逃げた人など、いろんな主体性がある。特攻隊をひとつの物語に還元するのは、主体の多様性や複雑性を抹殺することになる。これと同じ「物語の暴力」を左派が働いてはなりません。朴 「慰安婦」問題に直接的に関わってきた人は少数です。ですが、メディアが「慰安婦」問題に強く共感し、国民を巻き込んで議論が割れている。この分裂は、日韓という風に見えるけれど、私は左右だと思いません。私たちは政治的立場に基づいた見方をしがちで、立場に囚われずに事態を考えようとする人の空間は狭められた。だから、これまで聞こえてこなかった声を聞き、第三の空間を押し広げる試みをしたかったのです。

私が「帝国」という言葉に込めたのは、民族のみならず性や階級の支配、排除・差別の問題です。つまり、「慰安婦」問題はこれまで日本という国家主体の問題と考えられ、政治問題として理解されてきましたが、「移動」を促す経済の問題が見られていない。国家の経済的欲望を内面化する形で多くの人が「移動」していききましたが、そうしたことが抜け落ちていた。実際に人を搾取することで経済的利益を得たのは誰なのかという問題意識と、そこに多くの朝鮮の人が関わっていたということへの自己反省もありました。でも業者には日本人もいたわけですし、そのことも書いています。

二分法からのズレを描いた

中島 日本人兵士と協調した「慰安婦」というのは、支援団体が描く被害者像とはズレる。一方で、日本の右派が描く「娼婦」という像ともズレる。この二分法からのズレを描くことで「帝国」の暴力構造に迫ろうとしたのが、朴さんの著述だと思っています。

朴 当初、私を非難したのは韓国の場合には男性学者が多かった。日本を免責することは聞かぬ。ですが、そういう批判は何を免罪し、抑圧し、隠蔽しているのか問いただしたい。日本人、日本国家によって、朝鮮民族が支配され、被害者になったの言うまでもありません。

中島岳志

なかしま たけし・東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授。本誌編集委員。1975年生まれ。政治学者であり歴史学者。著書に、『中村屋のボース インド独立運動と近代日本のアジア主義』(2005年、白水社)、『アジア主義 その先の近代へ』(14年、潮出版社)、『下中彌三郎 アジア主義から世界連邦運動へ』(15年、平凡社)など。

ん。しかし、民族レベル以外の構造の問題が消されてしまった。

中島 80年代おわりから、90年代に議論されたサバルタンの声の代理／表象という問題だと思っただすよね。スピヴァク(注8)をはじめとして多くの人たちが批判してきたのは、特定のサバルタン像をつくり、代理／表象することの権力性と暴力性です。

朴 その通りです。私は「専門家でもないのに」とか「運動家でもないのに」とよく言われました。「当事者でもないのに和解を唱えるな」とも言われましたが、今日でも根強い、当事者を一元化する思考が、別の当事者を排除する権力として機能してきました。同時に「代弁者(後裔)の当事者性」が抜け落ちてきた側面もある。そういうことが顧みられなかったゆえの権力性だと思います。

中島 私も昨年、朴さんの在宅起訴に抗議する声明(注9)に名を連ねてから、「専門家じゃない」という批判もされました。私は思想史や昭和史も研究していて、広い意味で歴史学者でもあるつもりです。ただ、朝鮮語の文献が読めること、「慰安婦」の研究者であることなどが「慰安婦」問題を論じる「専門家」の要件になるのならば、ほとんどの論者は議論すること自体を封じられてしまう。専門家じ



朴裕河

パク ユハ・韓国の世宗大学日本文学科教授。1957年ソウル生まれ。高校卒業後に来日、慶應義塾大学文学部国文科を卒業。早稲田大学大学院文学研究科で学んだ。著書に『和解のために 教科書・慰安婦・靖国・独島』(2006年、平凡社)、『ナショナル・アイデンティティとジェンダー 漱石・文学・近代』(07年、クレイン) など。

「国家の物語に入れない人たち」について 書きたかった。

——朴裕河

やない」という言論の抑圧で、問題を多角的に論じられなくなる。

かき消された「主体性」

中島 「ナムの家」の方針に距離を感じていた元「慰安婦」の人が本には出てきました。特定の「慰安婦」像が確立されてしまうと、自分の思いがそこではかき消されてしまうからだと思います。

ナムの家において、日本を告発した人ももちろん重要です。どちらも否定できない。そういう多様な面がありながら、政治に翻弄されてきた元「慰安婦」の全体像を見ないと、問題は一步も進まない。朴 その女性は運動のあり方と

「慰安婦」をめぐる理解に異論を持つていた方でした。家族がいなかったこともあり、よく私に電話をかけてきました。日本のことを批判しないと、周りから「日本が好きなんだろう」「偽者の慰安婦」と批判されると話していました。

先にこちらが「許す」と言えば、日本がそれに応じた対応をするんじゃないかとも。その声を私は告訴される前の14年4月の韓国でのシンポジウムで伝えました。支援団体を通さず補償金を直接もらいたいという声も紹介しました。その一カ月半後に告訴されました。

中島 このズレや揺らぎが重要視されてきたはずなんです。「慰安婦」の問題になると、そっくり抜けてしまう。朴さんはここにメスを入れ、議論を喚起した。サバルタン・スタディーズの成果に基づく重要な問題提起だと思います。

2月5日、大阪市内にて

(注1) 『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘争』(プリワイパル社) は2013年8月に韓国で刊行されたが、この中の100カ所以上の記述が名誉を傷つけているとして「ナムの家」(元「慰安婦」)が共同生活する韓国・京畿道の支援施設「元「慰安婦」9人が14年6月に刑事告訴した。同時に、損害賠償などを求める民事訴訟も提起された。『帝国の慰安婦』は日本では、朝日新聞出版社から14年1月に刊行された。

(注2) 従属的地位に置かれていた人々。

(注3) インドの独立運動家。インドを植民地化した英国政府に追われ、1914年に日本に亡命。日本の右翼らに匿われた。

(注4) 朝鮮の文学者思想家。1919年、中国・上海に亡命。大韓民国臨時政府樹立に加わった。帰国後は民族主義的な立場から執筆活動をした。だがその後、創氏改名の推奨に尽力し、日本語小説を書いたため「親日」の烙印を捺された。

(注5) 「天下は一人(天朝)の天下なり」という吉田松陰の国体論。

(注6) 朝鮮を差別待遇せずに内地(日本本土)と一体化しようというスローガン。

(注7) ビルマとシンガポールで日本軍「慰安所」の現場に勤めた朝鮮人男性の日記。資料改題は安乗直ソウル大学名誉教授。日本では未出版だが、「ビルマ・シンガポールの従軍慰安所(日本語訳版)」がネット上で読める。 <http://ogabizvoel>

(注8) インド出身の文芸評論家、比較文学者。コロンビア大学比較文学・社会研究所の所長。「サバルタン」は語る事ができるか(1998年、みすず書房、上村忠男訳)で世界的に脚光を浴びる。

(注9) 在宅起訴後の15年11月26日に出されたこの声明は、東京大学の野上千鶴子名誉教授、元官房長官の河野洋平氏、元首相の村山富市氏、元「朝日新聞」主筆の故・若宮啓文氏なども名を連ねた。12月2日にも「起訴は不当だ」とする韓国の知識人194人による声明が出た。

一斉12月9日には、『帝国の慰安婦』は「学問的裏付けのない叙述によって被害者たちに苦痛を与える」とする日韓380人の研究者、活動家らによる声明も出された。

まとめ・写真撮影/渡部睦美・編集部